

数楽通信 R5 幕末から明治の岡山の学者達 R5.7.23

牧野富太郎の生涯を描いた朝の連続テレビドラマ「らんまん」に、美作教授が登場し、モデルは岡山に縁のある動物学者箕作佳吉（みつくりかきち）との話が、新聞に載っていました。箕作と言えば、幕末の蘭学者、箕作阮甫（げんぽ）が有名です。以下は津山市ホームページからの引用です。「津山藩医で洋学者の箕作阮甫。



1853年のペリー来航時にアメリカ大統領の親書の翻訳を命ぜられたほか、同じ時期にロシアのプチャーチンがやって来た時は、交渉団の一員として長崎に派遣されるなど、日本の開国に際して大いに才能を発揮した学者です。開国後、本格的な洋学の研究・教育機関の必要性を認識した政府1856年に蕃書調所を設立しました。阮甫は、その首席教授に任命されるのですが、この蕃書調所が東京大学へと発展することになります。「日本最初の大学教授」と呼んでも過言ではありません。阮甫の子孫も有名な学者ばかりで、その多くが東京大学に入学して後に教授になるというコースを歩んでいますが、とりわけ孫の菊池大麓（きくちだいりく）は数学者で、東京大学の理学部教授・学部長を経て、総長まで務めています。」冒頭の箕作佳吉は菊池大麓の弟にあたります。菊池大麓は幕末、江戸幕府の命によりわずか十一歳の時、イギリスに留学。明治維新で幕府が倒れたため、一時帰国しましたが、十五歳の時、明治政府の命により、再びイギリスに留学し、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジで数学と物理学を学び学位を取得、数学の論文も英語で発表しています。ここでは数楽通信ですので、菊池大麓のエピソードを紹介しましょう。「二度目の留学の前、菊池大麓十二、三歳の頃、菊池大麓は年少ではあるがイギリス留学し、英語が堪能であったので、明治政府は、まだチョンマゲを付けて大小を差していた元武士の政府の役人達に英語を教える先生として採用した。そして、しばらく授業をして、英語の試験が実施された。菊池大麓は、簡単な英語の問題を出したつもりであったが、英語を初めて学ぶ武士達には、かなりの難問であつとみえて、いつまで経っても答案を出してくれない。全く退屈した菊池少年は校庭へと出て行って、武士の生徒達が英語の問題と格闘している間、凧を揚げて遊んでいたという話である。」矢野健太郎「おかしなおかしな数学者たち」より

英国留学中には相関係数で有名なカール・ピアソンと親友となり、帰国後ピアソンの本を翻訳出版しています。また英文の"ANALYTICAL GEOMETRY"*解析幾何学*を書き、著者はBARON DAIROKU KIKUCHI *菊池大麓男爵*となっています。さらにグリニッジ子午線を経度0と決めた国際会議に日本の代表として出席しています。政治的にも活躍し、貴族院議員に勅任され、第1次桂内閣の文部大臣を務めました。

同じ箕作箕作阮甫の孫で、数学者となったのは菊池大麓の従兄弟に当たる呉文聡（くれあやとし）です。呉は統計学者で、欧米統計学を研究して多数の著書、論文を発表し普及、発展に貢献し、明治時代における我が国統計学の泰斗といわれています。太政官正院政表課（のちの内閣統計局審査官）では、国勢調査法の制定、官庁統計の改革、整備に尽力し、国勢調査が日本で行われていなかったことから、欧米のような国勢調査を実施しなければならないと主張したことで知られていて、「国勢調査の生みの親」といわれています。